



kazega, fuku

朝のベッド、隣にあいつはいなかった。

あるはずのぬくみも一人分。あんな喧嘩くらいでもう笑いあえないのかな。

のろのろ起きていたら玄関が開く音がしてあいつが冷えた缶コーヒーを持ってきた。

「昨日悪かった」

一晩外にいたの？ ばかね。体が冷えてるよ。

「もいっかい寝よっか」

お説教は後で。

※ ※ ※

ライトを浴びてB29の編隊が飛んできた。

動物がいなくなった深夜の動物園の広場は逃げてきた人でいっぱい。

やがてさめるような赤が町と空を舐めていった。

こわくて震えていると隣の家丸眼鏡がやっぱり震えながら私の手をぎゅっと握りしめた。

今、同じ場所の同じ空を孫と見上げている。

ふたりで。

※ ※ ※

塾帰りに雑居ビルに侵入して屋上まで来たら鍵をかけられた。

最初うろたえた彼女もそのうち俺にもたれて寝てしまった。

当てが外れた俺は、図書館で借りた本をネオンの光で読んで朝を待つ。

夏でも明け方は寒く彼女が抱きついてきた。

おいおい、朝の屋上でやられてもいいのか？ とその手を優しく繋いだ。

※ ※ ※

子どものように泣きじゃくる彼女の瞳から、大粒の雨が降り注ぎ、胸元の花柄がぬれそぼる。
昼のエレベーターは上昇していくのに、気持ちが沈んでいく。

「そんなにいや？」

すると

「ちがう」

って袖で涙を拭きながら笑った。

「うれしいの。君のことずっと好きだったから」

告白5分後、僕らは手を繋いだ。

※ ※ ※

エレベーターに夕日が差し込む。

影が先に飛び込んで来て制服が飛び込んできた。

上の階に住んでいる青井君。

コロンかな？ 柑橘系の匂いがして心臓が跳ね上がる。

別に好きじゃないのに顔が熱くなるのを感じて靴の先っぽを凝視してしまった。

やがてエレベーターは止まり、私は一瞬の恋と一緒に降りた。

※ ※ ※

真昼の歩道橋で欄干に腰掛けてそのまま後ろに背をそらした。

現世から自由になるはずだったのに、異世界に落ちこちて勇者と呼ばれるようになってその姫君と結婚することになるなんて！

送った指輪に頬染める俺の姫は俺の二倍あるからベッドで押しつぶされないように気をつけな
いといけないんだけどね。

※ ※ ※

見上げると天頂から大きな月が私を照らしていた。

誰もいない深夜の散歩道をぐるぐる歩く。

歩かないと帰れないから。

月は見下ろす。

私は睨み上げる。

恋人に裏切られた私を笑う資格、あんたにはない。

なによ。靴跡つきのくせに。なんて……。

黒い気持ちを持ち帰りたくなくて、振り切るように私は歩く。

夜の倉庫で物探ししていたら鍵を閉められた。

「開けて〜！」

って叫んだけど反応なし。長袖ブラウスじゃ寒い倉庫で朝まで！？ と思ってたら、扉が開いて千ヶ瀬くんが入ってきた。見上げると怒った顔で抱きしめられた。

「携帯は持っていて下さいよ」

机の上で鳴ってたんだろうな。

「ごめん。ありがとう」

※ ※ ※

「小学生の頃、家族でプールに行ったらたくさんの人に押し流されて、気がついたら一人で流れるプールに浮いてたの。両親を捜したけど、全然見つからなくて……」

「俺なら君を見失ったりしないよ」

「うれしい」

って言ったそばから

「わあ、あれほしい！」

って俺から離れていく。

俺の彼女は迷子の天才。

※ ※ ※

夜祭りの神社はたくさんのお店がでていてすごく賑やかだ。彼女が

「指輪がほしい」

と言うから、100円の指輪を買ってあげた。

「そのうち給料の三ヶ月分の指輪を贈るよ」

って言ったら、

「いらない」

ってつよがる。その時になってもそう言うかな？

十年以上先の話だけど。帰ったら宿題しなくちゃ。

※ ※ ※

巨大な四角い箱の光るボタンを押せばよい。

しかし夕焼けの病院のロビーに鎮座するそれは妙な威圧感があり俺を躊躇させた。

意を決し松葉杖でめあてのボタンを押した！

が、目標を誤った。

自分に裏切られた俺は冷たいペットボトルを手に叫んだ。

「俺はあったかいコーヒーが飲みたいんじゃあああ！」

※ ※ ※

昼休みのグラウンドのすみで、大きい小森君が小さくなってしゃがんでいた。

何してるんだろうと近づいたら、大きな両手で小さな茶トラを抱いていた。

「わあちっちゃいね」

って声をかけたら、

「こいつ紛れ込んできたんだ」

って笑った。190cmの大男のくせになんてかわいい笑顔。

すごくドキッとした。

※ ※ ※

早朝のカフェに呼び出された。

仕事終わったから出てこいってどこの王様？ 私は眠いっつーの。

傍らのバラの花束は存在感ありすぎ。ファンにもらったのかな？ ポーカルってモテるんだと思
っていたら

「誕生日おめでとう。一番にお祝いしたかったんだ」

って！その瞳から逃げられず幼なじみの攻撃に撃沈。

※ ※ ※

早朝庭でポチが何かに噛み付いていた。

タコのようなそれは俺を見て悲鳴を上げた。

とたん頭の中に流れ込んできたテレパシー。

彼女に会うため金星に行く途中宇宙船が故障。炎上しながら地球に不時着し、服を着るヒマも
なく逃げてきたという。

...しかしこのタコ、たこ焼き何人前？

と思った途端逃げられた。

髪を撫でる風が気持ちいい。朝の歩道橋で寝転がっていると、背中に足音を感じた。

「何やってるの？」

と声をかけられ、目の前に水のペットボトルを差し出された。

「酔っ払てるの？ だめよ。ちゃんと家に帰ってから寝なさい」

生返事をしてそれをもらって、帰ってから気がついた。

あいつ担任じゃん。

※ ※ ※

遊園地デートの帰り間際、些細な喧嘩をして飛び出した後、私は一人ベンチでふてくされていた。

しばらくして彼が両手に溶けかけのソフトクリームを持って来た。

不機嫌な顔をしてそれを差し出すから受け取ったら水のようにクリームが手を伝った。とたんカチンと来てまた喧嘩。

あ～あ。なんでこうなるの？

※ ※ ※

しん、と耳の中で音がするほどの闇夜の暗幕をそっと押しよけるような気配を感じた。

猫だ。

彼女は畳の上を足音を殺して忍び寄り、私の布団にするすると入っていくと、懐で丸くなった。

思い出すなあ新婚の頃を。

お前だけだよ。一緒に寝てくれるのは。

その時隣の部屋にいる妻の大きないびきが聞こえた。

※ ※ ※

ソファで深夜アニメ見ていると、画面からヒロインが出てきて俺に寄り添うように座ると「疲れたわ」

と言いながら寝息を立てた。すると主人公が画面から来て凄む。

「姫に何をした」

とたん彼女が

「五月蠅い」

彼に張り手を喰らわせ彼を引きずり戻っていった。

番組終了まで赤い手の跡が痛々しかった。

※ ※ ※

真夏の電車内で気分が悪くなった時、助けてくれた人は夏服だった。

10月の衣替えで長袖になったからか、彼を見つけられない。向こうもきっと私のことを忘れてしまうだろうな。

あの時名前を聞いておくんだった。また会いたい。と思っていたら目の前に彼が立った。

友達に押しやられて赤い顔をして……。

※ ※ ※

いきなりくちびるを押しつけられ、そのまま押し倒された。

学校の廊下の床は固く冷たかった。夕日が徐々に傾き、上に乗っているヤツのにやついた顔を照らす。

右手には図書館で見つけた魔導書。魔法など信じてなかったが。

「願いは？」

俺は

「退屈がなくなればいい」

と答える。悪魔は笑う。

「俺も同じだ」

※ ※ ※

早朝練習に行く途中、赤く綺麗な落ち葉を拾った。

そこには小さな文字と地図のようなものが書いてある。

サボリを決めこみ地図を頼りに町内を歩く。

目当ての場所は映画館だった。

まだ暗い路地に明かりがぽっと灯った。

足下をたくさんのねずみが列を成して入っていく。

ねずみの映画会のチラシだったのか。

石焼き芋の音がする。

やせる約束なんてどこへやらでエレベーターへダッシュしたが、ランプは23階で止まっている

。

「たかが10階！」

と、今度は反対側にある階段にダッシュ。

半ば転げるように駆け下ると焼き芋屋のおじさんが笑顔で待っていた。

大きい芋を袋に入れてくれて気がつく。

財布……忘れた。

※ ※ ※

深夜乗り込んだエレベーターの床は蜂蜜のような物体で光っていた。

誰かが愛し合った後かとは下卑た考えも浮かんだが頭の中で一蹴する。

二つほどランプが移動して止まったから降りようかとドアが開くのを待った。

が何故か開かない。

非常ボタンを押そうと伸ばした手にねとねとが垂れてきた。見上げると…。

※ ※ ※

体育館倉庫の上に小さい空間がある。

そこで昼飯を食おうとはしごを上がると女子がいた。

彼女は携帯に二言三言言って

「いくじなし」

って怒りながら切るとカバンから弁当を2つ出して1つを俺に押しつけた。

「余ったの。食べて」

彼女は怒りながら食べた。

もらった弁当の卵焼きは、何故か蜂蜜の味がした。

※ ※ ※

障子越しの光に目が覚めた。

庭から甲高い音がする。

上着を羽織り布団から抜け出ると障子をからりと開けた。

「お父さん！」

「おはよう！」

子どもらの笑顔が迎えられ

「おはよう」

と返す。子どもらは朝の風にゆれるコスモスに水をやる。

私は朝餉の匂いに釣られ台所へ向った。

……ああ。そんな日もあった。

※ ※ ※

廃車置き場のパトカーはまだあった。

カビと埃の臭いにむせながら黒いシートに座ると彼女も横に座った。

「これが秘密基地か。鍵なくて大丈夫なんだ」

シールやポスター貼り放題の車内は5年前と変わらない。見せると約束したから連れてきたが恥ずかしい。

「大丈夫？」

彼女が聞くから顔いて唇を塞いだ。

※ ※ ※

保健室のベッドで寝とったら、となりからあはんうふんな声がしてきた。

誰やこんなところで思いつつ耳に神経を集中すると「やだこんなのだめ〜」って！ ベクトル上に上がりすぎて鼻血出そう。

誰や誰やと眼鏡かけて隣のカーテンを見とったが我慢できずカーテンあけた！

保険医がゲームやとった。

※ ※ ※

じいちゃんが死ぬ前に鍵をくれた。俺宛の遺産らしい。

ならばとじいちゃんの部屋の中を探したがそれらしい物はない。

舌打ちして畳の上で寝転び天井を見たら、そこに鍵穴があった。

脚立を持ってきて鍵を差し入れると天井が開き、中から女の子出てきて俺にキスした。

妙に軽い女だと思ったら抱き枕じゃん！

堺が悩んでいると聞いた清水と末永は妹尾の家のカフェでなぐさめる会を開いた。

堺は思い詰めた顔で一通の手紙を出した。

「これが靴箱に入っていたんだ」

大変流暢な字で一筋何か書かれている。

「呪いの手紙かな」

恐れる堺を相馬は

「風吹かばって和歌だよ。お前片思いされてるんだ。多分」

と苦笑した。

※ ※ ※

空を飛んでいたらいきなり現れた雲に跳ね返され、起きてしまった。

目を開けると彼の顔。今深夜のホテルで二人きり。

「何笑ってた？」

「えっと夢を見たの。空飛ぶ夢」

そう告白すると、彼は引きつった笑顔で私に羽根枕を投げつけ

「寝てんじゃねえ！さっさと書け！」

と怒鳴られた。締め切りまで後2時間。

※ ※ ※

本ばかり読んでいる浅川に告白したのは一週間前。

何故か泣かれたため明確な返事はなかった。

大学祭準備の後遅くなったから「送る」と言って強引に車に乗せた。

暗い車内でも浅川はカバンから何か出そうとする。

むかついて「俺より本が良いのか」と聞いたら、首を横に振った。

「これ、防犯グッズ」

おい！

※ ※ ※

早朝暗いうちから家を出て川沿いを走る。

薄紫に夜が明ける様はきれいだな。

下草は夜露でしっとり濡れて朝日が昇るとまるで宝石のように輝くの。輪にしたらきつと綺

麗な冠になると思って、携帯電話で写メして送った。

ゴール側の高架下で鳴った。

「綺麗だね」

夫の声は眠そうだけど嬉しそうだった。

台所で何か音がした。

泥棒？ おそるおそる台所を覗いてみたけど誰もいなかった。

ほっとして中に入ると何か気配がする。

そちらを見ると部屋の隅で先日亡くなった祖父が微笑んでいた。

「たまにはお酒をそなえておくれ」

と彼は消えた。

テーブルの上には私秘蔵のお酒と杯が5つ。

宴会でもしていたのかな？

※ ※ ※

真っ昼間の電車の中で瓶に入った青い魚を拾った。

幸せはすぐ近くにといいあの話を鵜呑みにするわけではないが、なんとなく頬がゆるむ。

その時女の子が目の前に来ると俺の頭をひっぱたいて青い魚を奪い、隣の車両に消えた。

後日そいつが塾の隣の席になり、青い魚は闘魚と呼ばれると知ることとなる。

※ ※ ※

夜中の真っ黒な川を見下ろし彼女と飛び込もうと約束が、実際飛び込んだのは僕だけ。

僕は病院のベッドで医者に愚痴った。

彼は柔らかに微笑んだ。

「それは無理というものです。彼女らに死という概念がありませんから」

横で看護婦姿の彼女が医者と同じように笑った。

量産型なんて買うんじゃないかった。

通学路の並木道で、女子が大泣きしていた。

見ないようにUターンを決めた時、目が合ってしまった。

こっち見て泣きじゃくってるの、同じクラスの奴じゃん。

「おはよ。どした？」

「うちの猫が死んじゃったの」

涙の跡が朝日できらりと光る。

ハンカチが昨日のままなのに気がつき俺は為す術なく立ち尽くした

※ ※ ※

露天風呂から立ち上がる湯気は朝靄に煙る山へ。

まっ赤に色づいた紅葉の葉はひらり落ちて水面を揺らす。

冷えた肩に湯をかけつつ、しばらく濃い緑と紅葉のコントラストを楽しんだ。

温泉街を散策すれば温泉卵を温める店員の姿。一つ買い求めた。うまい。

ポケットの中で家の鍵が鳴ったが、気づかないふり。

※ ※ ※

夕方のコンビニで立ち読みしてたら外で喧嘩が始まった。

大勢対大勢でなかなかすごい。

店員が呼んだパトカーのサイレンと共にヤツらはちりぢりに逃げていった。

警官が店に入ってきた。

「またですか」

恐縮する店員には悪いが噂通りのものを見て満足だ。

エサ場を取り合う猫共の抗争は見応え抜群だった。

※ ※ ※

深夜のキッチンで仕事帰りの夫を出迎えた。

夫は神妙な顔で

「怒らないでくれる？」

と言いながら段ボール箱を目の前に置いた。

大きな赤いリボンをかけたそれは中から音がする。

そっと開けるとかわいい子犬が入っていた。

.....今夜もキッチンで5年前家族になった犬と

「遅いね」

笑い合いながら夫を待つ。

※ ※ ※

火は人を物思いに耽らせるらしい。

理科の授業でアルコールランプの火をじっと見る関を見ていてそう思った。

キャンプ2日目の朝、遊歩道に散歩に出た際、息子にそんな話をした。

戻ってきて火を見つめる息子は、関君と同じような顔になっていた。

火は木を舐めながら火の粉を吹き散らし赤に青に踊る...

※ ※ ※

夕焼けに染まる廊下で橘を見かけた。

食い入るように階下を見るその先で陸上部の内藤が棒高跳びをしていた。

内藤が好きなのか？

気づかれぬように帰ろうと思ったら悔しげな独り言が聞こえた。

「私の方がもっと跳べる」

同時に脳内で橘の猫のようにしなやかな体が宙を舞った。

俺の恋はそこから。

※ ※ ※

彼氏に振られた。

ベッドに横になっているとやがてスリッパの音がした。

彼かと思って急いで起き上がったけど、やがてノックと共に

「大丈夫か？」

と兄の声。

いつも靴下のままなのに何故スリッパ？ まちがえちゃったじゃないの。

泣き出しそうになりながらドアにクッションを投げた。

「ほっといて。馬鹿」

昼のコンビニで買って来た氷をかじりつつ黒い画面を見据えた。

このままでは画面の向こうの嫁が家出してしまう。

意を決してパソコンを分解掃除。夜中には電源が入った。

ああやっと会える。

ソフトを立ち上げ、嫁の頭を撫でてやろうと笑っていたら、現実の嫁がかわいい声で近づいてきた。

どうする、俺！

※ ※ ※

傘を畳んで彼女と寄り添いながらレストランのドアを開けた。

奥から出てきた店員が一番奥の席に通し、固くなる俺の代わりに彼女が二人分の食事を頼むと奥から前菜を持ったシェフと穏やかなマダムが出てきた。

直立して

「娘さんを僕に下さい」

深々と頭を下げると、シェフに

「喰ってから言え」

と叱られた。

※ ※ ※

夜遅く川を眺めていたら何かが流れていくのが見えた。

何だろうと思っていたら、街灯に照らされたのはクジラの巨体だった。

クジラはぶわんと潮を吹いた。

しぶきが丸い指輪みたいに光ってきれいだな。と思ったところで目が覚めた。

忘れないうちに描こうと、私はパジャマのままスケッチブックを開いた。

※ ※ ※

私の小鳥は肩に乗ると耳を甘噛みしたり唇をついばむ。

えさをやるとおいしいと鳴いて、うれしそうに飛び跳ねる。

ある日、窓を開け放して掃除をしている間にうっかり鳥かごを開けてしまった。

窓から逃げる小鳥を追う翼を私は持っていない。

私が嫌になった？ あの人のみたいに。

涙がつうっと頬を伝った。

※ ※ ※

彼女から手袋を投げつけられた。

寒いのになんで投げる？

「この裏切り者。決闘だ！」

「はあ？」

朝の並木道でまた古典的な。それに

「お前を裏切った覚えはないんだけど」

「昨日坂本さんと浮気してた」

そりゃ誤解だ。帰り道に少し話しただけ。

一々口で説明するのも面倒だから泣いてる彼女を抱きしめた。

※ ※ ※

夕日が影を長く路地裏に伸ばしていく。

あの子はどこに行ったかな？ 赤い着物の女の子。

あ、向こうの角におかっぱ頭が見えた。

今はあの子が鬼。

つかまるもんかと夢中で逃げていたら、いつの間にか赤い野原にいた。

女の子が僕の腕を掴んで、足下で揺れている曼珠沙華より赤い口で嗤った。

「つかまえた」

※ ※ ※

早朝練習があるって言うから来たのに音楽室には誰もいなかった。

騙されたらしい。

あれ？音楽室の教壇に小さな蜜柑がおいてある。誰かの落とし物かと思って近づいたら、蜜柑から足が生えてこっちに向かって襲ってきたんだ！

「そんな夢で私は起こされたのか」

エイリアンより不機嫌な彼女の方が恐かった

恥ずかしくてアルコールに酔ったみたいに顔が熱い。

昼の公園でこんなことになるなんて。

うるんだ瞳で見上げると、先輩はすごく困った顔をした。

「大丈夫、続けても」

って聞かないで。仕方がないわ。先輩の指、やさしい。

でも……痛い。

すっころんだ拍子にすりむいた右膝の消毒、めちゃめちゃシミるよ！！

※ ※ ※

夕方カフェで待ち合わせた。

君がすごく可愛くケーキのフィルムをくるくるとはずすから、思わず水を飲み干してしまった

。

「喉渴いてるの？」

心配そうにしてくれる君が好き。

「別に」

なんて照れ笑いしてるけど、本当は君をこれから何処かに連れ込んで好きにしちゃったりできるのかなって思ってるんだよ。

※ ※ ※

自転車で道路を横断していたら車にはねられた彼を見舞いに来ただけど、思ったよりも元気かも。

でもギプスで固められた右手と左足が痛々しい。

「なあこっち来いよ」

内緒話かなと思ってベッドに腰掛けて彼の顔を見上げたあら、キスされて口の中に飴を押し込まれた。

なにすんの？ 甘いじゃない。馬鹿。

※ ※ ※

鹿村が

「理科室にエロ雑誌忘れた」

と言うから日曜の学校に忍び込んだ。

職員室にいる先生に見つかったら停学だ。

そおっと理科室まで行くと鍵が壊れてる小窓から入って雑誌を回収。
ほっとしていたら足音が。
恐ろしさに思わず鹿村と抱き合ったら、
「お前ら同姓恋愛はよくないぞ」
と最悪な誤解をされた。

歩道橋を登り切ると明けていない空が夜のように広がっていた。

美しかったイルミネーションが消えていく。

朝はこんなにも暗いのだと驚かされた。

昨夜から一緒に飲んでいた女は高いヒールの靴を手で持ち微笑んだ。

しばらく見つめ合った後、

「朝って暗いのね」

と言う彼女の唇が愛おしくなってキスをした。

※ ※ ※

「深夜の神社はしーんとしてるね」

「誰かが愛し合ったりして」

「アホ」

今年2月のチョコが何故か動くようになったと依頼を受けた便利屋の俺と坂口は、まっ暗な神社の裏でキレイにラッピングされたそれを発見。

拾い上げると坂口が微笑んだ。

「賞味期限切れだけど、あんた宛だから食べてね」

「え？」

※ ※ ※

友達数人と遊園地に遊びに来たけど、絶叫系には乗れない私は匂いにつられて購入したポップコーンを食べていた。

その時本を読み耽っている土本君を発見。

「乗らないの？」

「ああいうの苦手で」

苦笑する土本君。

「それじゃ、一緒に待ってようか」

私もipod出して音楽を聴いた。

ごめん。ちょっと幸せ。

※ ※ ※

明け方まで飲んで帰ろうとしたら土砂降りにあった。

雨はますます激しく時折雷も鳴っている。

仕方なく近くのファミレスに避難。

店員にコーヒーを注文してひと心地つくと、知った顔を見つけた。

同じサークルの女の子だ。

「やあ」

と声をかけると

「どうも」

と泣き笑いするからうっかりときめいてしまった。

※ ※ ※

老婆が橋のたもとで飴を売っているが、朝靄の漂う朝に飴を買う者はいない。

「甘い飴はいかが」

酔い潰れての朝帰り、手土産がほしかった私は老婆に近づいて飴を所望した。

すると老婆は

「今夜はお楽しみだね」

と不気味に笑い飴をくれた。

たしかに妻とそうなった。

翌日同僚に評判の媚薬と聞き赤面した。

※ ※ ※

また来たか。

この前が最後だと言っていたから私は嬉しいよ。

お前は？

そうか。チキンなんて悪口を言われたか。

泣くんじゃないよ。

お前はいい子だ。

私がお前を慰めよう。見ておいで。

...そして私は部屋一杯に星を降らせる....

笑顔になったね。

またおいで。

取り壊し寸前のプラネタリウム、ある夜の奇跡。

※ ※ ※

朝靄の橋を渡って猟場へ行った。

罠にかかった後はあるが獲物がいない。

探すと微かに血が森の奥へと続いていた。

気取られぬよう追うと、草むらの奥で怪我をした母親の袂で怪我をした子狐がぬくまっていた

。

親子だ、金になると銃を構えたその時、母狐と自分の母がかさなり、思わず銃を下ろした。

もうメールしないと決めたのは夜の並木道だった。

夏の頃はまっ暗でなにもなかったけど、今日は人もたくさんいて賑やかで、みんなしあわせそう。

並木道に施された無数の星があまりにもキレイで涙が出てきて、自分との約束を破って携帯のボタンを押したの。「会いたい」って。

天国まで届いてますか？

※ ※ ※

晃が転校する。

お別れ会で丸くなった席の中央で花束を抱えた晃が挨拶をした。

全部終わって放課後、晃のまわりに大勢が集まっていたのがウザ。

鞆を担いで帰ったのに、忘れ物に気がついて戻ったら晃が一人でいた。笑顔がウザい。

「あのさ、遠距離でよければ付き合って？」

「やだ」

うそだよ。泣きそう。

※ ※ ※

朝リビングのソファで何かが動いた。

眼鏡をかけて見ると家の毛布に初対面の女の子がくるまっている。

まさかお持ち帰りしたのか？ 確かに昨日強かに酔ったからなあ。

さてどうしたものか。

頭をボリボリ搔いていたら、女の子が目を覚まし、ドスのきいた声で

「おはよ」

と言った。

……説明しろ。昨日の俺！

※ ※ ※

友達数人と遊園地で遊んで、最後に観覧車に乗った。

他愛もないことを話して、雲間から差す夕日に輝く街に歓声を上げた。

なのに帰りにぽつぽつと降り出した雨。

傘を買いたいけど金欠で買えない。

すると利香が

「しょうがない！」

と傘に入れてくれた。

ちょっと役得。

俺たち、カップルに見えたりするかな？

※ ※ ※

自分が置かれている立場が規制対象というのは居心地悪い。

近親相姦や超年の差カップルが愛し合ってるマンガが東京都で規制されるようだ。

深夜眠れずベッドで転がっていると部屋に忍び込む足音。

目の前に愛しい妹の顔が。

「俺たちは規制対象らしいぞ？」

「それなら東京から引っ越せば？」

それもいいか。

※ ※ ※

休日、真っ昼間から畳の上で寝転がっていると猫がきた。

彼女は私の側でぐるぐるまわると私を背もたれにして眠ってしまった。

こら。ここは進入禁止だぞ？ 爪研ぎも心配だし、和室に鍵を付けなくちゃダメかと思ったが
すびすび聞こえる寝息にその気も失せた。

お前、私に愛されてるってわかってるんだね。

※ ※ ※

桜吹雪が雪のようだと微笑む幼なじみは、見合い相手のことを

「好き」

と泣いた。

最近そいつと別れたという噂を聞いた。

本物の雪があつた桜吹雪のように見える夜、自宅の庭で彼女を見つけた。

慌てて庭に出ると

「好き」

と凍える指先で私の頬を捕らえる。

「早く言え」

私は彼女を抱きしめた。

※ ※ ※

夕日が差し込む床の上をコーヒーが汚染していく。

「ごめん、愛してる」

って私を抱きしめるけど、奥さんと子どものところに戻るならカーペットが染みになる前に放してよ。

テレビで映っている隕石。

世界が終わるって？

私の世界は今終わったわ。

それなのに、あなたの頬を叩けないのが悔しい。

昼休み同僚とモンハン3rdやってた。

狩り終わってゲームの中だが温泉に入る。

「仕事後のひとつ風呂はいいな」

とため息。

「だね～。坂本。リアルで温泉連れてってよ」

「らじゃ～」

PSP片手に手帳を出して書き込んで……あれ？

顔を上げてうっかり見つめ合ってしまった相手は女の子だと気がついた。

※ ※ ※

お風呂から水音が聞こえる。

シャワー止め忘れたかな？

ベッドから這い出してのろのろドアを開けると、たくさんのこびとが踊りながらお掃除をしていた。

床も天井もピカピカ。

なんて魔法？ すごいわ。年末の大掃除は楽勝よ！

……なんて思いながら目を覚まし、リアルの風呂場を見てげっそりした。

※ ※ ※

早朝、橋の側で釣りをしようと思ったら、子どもが二人やってきて服を脱いで川に入った。

まさか溺れないだろうなと見守っていると、そいつは朝日で光る水面に手を入れたかと思うと手品みたいに素手で魚を捕え、

「やるよおじさん」

と笑いながら俺に魚を差し出した。

子どもの頭はキラキラ光る皿があった。

※ ※ ※

壊れ果てた街の路地裏に天使が舞い降りたのは早朝だった。

朝日に輝く翼の天使は汚れた者をこの世の天国に連れて行くという。

弟は天国に行けると喜んだが私は恐ろしさに震えた。

その後鳥の翼を付ける手術を受けた。

私は生きて弟は死んだ。

亡骸を抱いて泣く私に天使は
「飛べば忘れるわ」
と微笑んだ。

※ ※ ※

首筋に付けられた跡を鏡で見ながら、急激に冷めていく自分に気がついた。
やっぱり利用されたのかと。
でも彼が去った窓辺はさびしくて、窓から見える並木道に行く人たちの中に彼を探していると、大きな羽ばたきの音と共に彼がベランダに舞い降りた。
「お前を連れに来たよ」
私を抱きしめ甘く囁いた。

※ ※ ※

朝風呂しようと思ったら誰かがいる。
開けて見ようとドアに手をかけたら半裸の太った外人が出てきて、
「メリークリスマス。大きくなったけど特別ね」
と頭を撫でられた。
そいつは赤い服に着替えて気がつくとも消えていた。
浴槽を見ると、俺が欲しかった熱帯魚が入っていた。
てか、水槽もおまけしろ！

ついのべまとめ 2010年10月～12月

<http://p.booklog.jp/book/33302>

著者：みずきあかね

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/akane2003/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33302>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33302>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.